

ジョン・ディーのスクライニング魔術

武内 大

はじめに

ジョン・ディー（1527-1608/1609）は、自然哲学者として科学技術の発展に多大な寄与を果たし、エリザベス朝随一の碩学と謳われた程の人物であるが、後年水晶玉を用いてヴィジョンを受け取る「スクライニング（scrying）」という魔術的技法によって天使や精霊たちとの対話に没頭する。その膨大な記録は、ディーの死後ちょうど半世紀経った1659年にメリック・カソーボンによって『ジョン・ディー博士と（…）精霊との間に多年にわたり起こったことの真正にして忠実なる物語』というタイトルで刊行され、以降ディーは迷信深い狂信者という悪評を浴びせられることとなった¹。いったいディーは自らの自然哲学的探究と天使魔術の関係をどのように考えていたのだろうか。本稿ではこうした問いを背景に、ディーの学問体系におけるスクライニング魔術の位置づけ、及びその方法的意義を炙り出すことにしたい。

1. 至高技芸とスクライニング

1570年に刊行された『ユークリッド幾何学原論』英訳版に付されたディーの「数学的序文」は、当時の科学技術の発展に甚大なる影響を与えることとなった。その中でディーは、天文学、音楽、地理学、航海学、建築学、図像学、光学等々、実に広範囲にわたる諸学問を数学によって基礎づけ、体系化した。とりわけ興味深いのは、彼の体系の頂点に屹立する「至高技芸（Archemastrie）」という学問である。ディーによれば、至高技芸とは、「あらゆる数学的技芸によって企てられ、あらゆる自然哲学によって下された、全ての価値ある帰結」を、第一に「実際に感覚可能な経験」へと、第二に「個々の技芸では望み得なかった完全な経験の遂行」へともたらしすことを教えるものである（MP, A.iiij^v）。クルリーによれば、至高技芸という術語自体は、錬金術師トマス・ノートン（1532-1584）に由来するが、ディーはさらにその意味を敷衍し、ニコラウス・クザーヌス（1401-1464）やとりわけロジャー・ベイコン（1214-1294）の「経験学（Scientia Experimentalis）」と結びつけている²。ただしベイコンやディーの言うところの経験概念は、ディーパスによれば、「近代科学的な管理された実験概念」というより「観察（observation）」といった程度のニュアンスに近い³。

ベイコンによれば、経験学には三つの特権ないし価値がある⁴。第一に「それら全ての諸学問における高貴な諸帰結を、経験を通して探究すること」、第二に「それらの諸学問が他のいかなる方法によっても与えないような重要な諸真理を、それら諸学問の範囲の中で与えること」、第三に「自然の諸々の秘密」、すなわち「未来・過去・現在の知識」、及び「通常の判断占星術を凌駕する不思議な諸々の業を探究すること」である。最後の特権には魔術的経験も含まれているが、呪文によって精霊を呼び出すような精霊魔術は退けられ、いわゆる自然魔術に範囲が限定されている。

最初の二つがディーの至高技芸にも認められることは容易にみとれる。第三の特権は、至高技芸に熟達する者の仕事を助けるものとしてディーが挙げた三つの補助的学問において継承されている（MP, A.iiij^v）。まず一つ目は「魔術（aldirangiat）」と呼ばれるものである。クルリーは、この言葉がイブン・シーナー（980-1037）の『諸学問の区分について』のなかで語られている「魔術学（scientia aldirangiat）」から採られたものと推測している⁵。そ

これは「諸事物の隠れた効力を操作する自然魔術の一形式」を意味している⁶。二つ目は「シントリリアの術 (Ars Sintrillia)」と呼ばれるものである。これは、水盤の上に光沢のある剣を置き、水と剣の輝きを通じて不思議な光景を見る術、すなわちスクライニングの一種である。そして三つ目に「もう一つの光学的学問」というものが挙げられているが、少なくともこのテキストでは、その詳細について何も語られていない。

2. 占星術と光学

既にディーは、処女作『アフォリズムの予備教示』(1558&1568)の中で、光学についての詳細な理論を展開していた。この書では、天文学と占星術が主題的に扱われている。彼がエリザベス一世の戴冠式の日取りを占星術によって決定したというエピソードはよく知られているが、この書で語られている占星術は、人間の吉凶を占う類いのものではない。「数学的序文」の中で明瞭に語られているように、天文学が恒星や惑星の大きさ、運動、地球からの距離などを扱うのに対して、占星術は、「恒星や惑星からの隠れた影響力」を扱う (MP, b.ij)。ディーは後者をもあくまで数学的技芸として捉えている。しかもそれはコントロール可能という点で魔術的性格を帯びている。

ルネサンスにおける星辰魔術の伝統は、マルシリオ・フィチーノ (1433-1499) に代表される。彼が音楽、詠唱、薫香、護符などを利用しつつ、「氣息 (spiritus)」を媒体として「想像力」によって星辰の影響力をコントロールしたのに対して⁷、ディーは天体が放出する放射線 (radius) を自然的に扱い、それを「反射光学 (catoptrics)」によってコントロールしようとする (PA, XLVIII, LII)。つまり放射線の方向や強さを、幾何学法則に基づいて測定し、鏡を用いて自在に調節することができるというわけである。

しかしながら、ディーの光学理論は、それ程独創的というわけでもなく、13世紀のオクスフォード学派、すなわちロバート・グロステスト (1168/70-1253) やロジャー・ベイコンからの強い影響のもとで成立した。グロステストは、新プラトン主義的な「光の形而上学」とアル＝キンディ (801-873?) の光学を統合し、「スペキエス増殖理論」により、光の幾何学的解明の方途を開いた。さらにロジャー・ベイコンは、師グロステストの数学的方法をより厳密化し、他方で師に反して光を自然的に捉え、光の直線伝播、屈折、反射に関する詳細な分析を行なった⁸。スペキエス増殖理論によれば、光源である太陽の「光 (lux)」は、媒質を通過してスペキエスとしての「明かり (lumen)」を産み出し、さらにその類似物が近接作用によって連続的に増殖していく。この理論で重要なのは、光の伝播のあり方が幾何学的原理に基づけられるという点、及び自然的効果における質的差異が、スペキエスの増殖という量的相違へと還元されるという点である。

ディーの光学理論は二つの側面を持つ。一つはグロステストのような形而上学的な側面である。ディーは「第十天 (primum mobile)」のような形而上学的領域を、コスモスの各被造的部分を自らに引き寄せる凹面鏡のようなものとして比喩的に語っている (PA, XXVIII)。しかしディーの探究する光は、単なる比喩にとどまらず、自然的な光でもあった。ディーは基本的にベイコンのスペキエス増殖理論を踏襲しているが、クルリーによれば、この理論がもつ含蓄を最大限に引き出し、それを占星術というコンテキストの中でより体系的に展開したところにディーの功績がある⁹。

ところで、ここで語られている光学というのは、可視的な光線のみならず、「放射線 (radius)」というより包括的な事象を扱っていることに注意しなければならない。

あらゆる星の放射線は二重である。すなわち一つは感覚可能な、或いは明るんでいる放射線であり、もう一つは、より秘密の影響力を持つ放射線である。後者はこの世界に含まれているあらゆるものを瞬時に貫く。前者はそれ程貫通力がなく、なんらかの仕方で妨げられてしまうこともありうる。(PA, XXV)

つまり、光とは感覚可能な放射線のことであり、もう一つの放射線はオカルト的放射線とでも言うべきものである。星辰からのオカルト的な影響力という問題事象は、フィチーノやハインリヒ・コルネリウス・アグリッパ (1486-1535) においても語られており、ディー独自の発想というわけではないが、いずれにしても感覚に対して隠れているという消極的表現では曖昧さを拭いきれない。ディーはとくにオカルト的放射線についての明確な定義を

していない。しかしテキストを読む限り、次の二つの解釈が可能となる。

第一にそれは、磁石の力と考えることができる。ディー自身述べているように、それは「固体的物体を貫通することができる」からである (PA, XXIII)。第二にそれは精神的な放射線と解釈することができる。

精神的スペキエスのみならず、他の自然的スペキエスもまた、明かりを通じて、或いは明かりなしに、諸事物から視覚へと、そればかりか時折他の感覚へと流れ出る。それらは、特に我々の想像的精神の内へと、あたかも鏡の内ですらなるが如く凝集し、自身を我々に示し、我々のうちに驚異をもたらす。(PA, XIII)

この引用からも読み取れるように、<可視的-オカルト的>という区別をそのまま<自然的-精神的>という区別に単純に重ねることはできない。精神的スペキエスの中にも可視的な光を通じて流れてくるものがあるからである。問題はオカルト的で尚且つ精神的なスペキエスの存在である。ディーは精神的な放射線をもある種の光学によって、自然的放射線との類比によって捉えようとする。けだし、このような精神的スペキエスの取り集めの技術こそ、スクライニングの技術を意味しているのではないだろうか。一方、オカルト的な自然的放射線というものとすれば、磁石の力こそ、それに相当するのではないだろうか。

ゾニーは、ディーが「鏡占術 (catoptromantia)」と「水晶玉占術 (crystallomantia)」という二つの伝統的スクライニング技術を両方行っており、前者が未来に関するヴィジョンの獲得を目的とし、「黒曜石の鏡」を使用したのに対して、後者は天使や精霊を召喚して情報を得るのを目的とし、「水晶玉」を使用したと主張している¹⁰。前者が先に触れたシントリアの術に相当するのだとすれば、「数学的序文」で述べられていた「(言わば) もう一つの光学的学問」というのは、とりわけて水晶玉占術のことを指すものと解釈できる。これに対して、『アフォリズム的予備教示』では、スクライニングとは言っても、「もう一つの反射光学的学問」とでも言うべき鏡占術が問題になっていたと解釈できるのではないだろうか。

3. 実在のカバラと錬金術

ディーは、『聖刻文字のモナド』(1564)の序文的な役割を果たしている「マクシミリアン王への献辞」の中で、伝統的なヘブライのカバラを「通俗的」と批判し、「実在のカバラ」という独自の方法論を打ち出している。前者が「言表されたもの」に関わり、人間によって書かれた文字の解釈にとどまるのに対して、ディー自らの標榜する実在のカバラは、「存在するもの」に関わり、創造の際に神御自らの指によって記銘された「自然の書物」の解釈を目的とする。ディーによれば、ヘブライのカバラだけでなく、通俗的文法学、数学、算術、幾何学、音楽、天文学、光学、静力学といったエクソテリックな諸原理は、医術、緑柱石の術、ヴォアルカドゥミア、達人術—これらは全て、錬金術ないしその新しい形態に関わる¹¹—といったエソテリックな新しい原理によって乗り越えられ、改良されねばならない。そしてこの新しい原理を包括し照明するのが実在のカバラという方法論に他ならない (MH, 134/135, 136/137)。『アフォリズム的予備教示』や「数学的序文」において扱われているエクソテリックな諸学問が、創造以降の「ラチオと自然の法則」(PA, 122/123)を探究するのだとすれば、エソテリックな諸学問や実在のカバラは、「創造の法則」(MH, 134/135)を探究する。後者は客観的な考察対象というよりは、意識の変容と相関的に考察される独自の問題領域を形成している。

上述の「緑柱石の術 (ars beryllistica)」というのはパラケルスス (1493-1541) に由来し、「緑柱石の中にヴィジョンを見る術」を意味する。使われる石は特に緑柱石に限定されるわけではないため、この術はより一般的にスクライニングと呼ばれても差し支えないであろう。興味深いのは、このテキストにおいて緑柱石の術が、天使との対話の為の手段というより、錬金術のコンテキストの中で捉えられているという点である。ディーによれば、「水晶のラミン」の内に「土の上や水の中あらゆる月下のもの」を、「柘榴石やルビー石」の中に「空気と火の全領域」を覗き見ることができる (MH, 136/137)。おそらく錬金術の作業工程で言うところの白化 (アルベド)、赤化 (ルベド) にそれぞれ対応しているのであろう。ここで水晶と柘榴石、ルビーそれぞれに担わされたスクライニングの役割の相違は、石の色という観点からの連想によるものであり、経験的根拠にもとづいて語られているとは到底言い

難い。

『聖刻文字のモナド』本文の定理 23 に書かれた世界創造の図では、「地、水、空気、火」と「闇、水晶の静澄、黄化、辰砂」のそれぞれ四段階が語られている (MH, XXIII)。後者は錬金術の「黒化 (ニグレド)、白化、黄化 (キトリニクス)、赤化」という作業工程に対応している。前二段階は「地上的世界」、後二段階は「天空的世界」に割り当てられており、「マクシミリアン王への献辞」の記述と整合的であることが確認できる。さらに世界創造の図から読み取れることとしてもう一つ重要なのは、錬金術によって可能となるのが天空的世界、すなわち「時間地平」までの上昇であるという点である。そこでははっきりと書かれてはいないが、天使召喚魔術こそ、「永遠の地平へ」の上昇、つまり「完全なる変容 (metamorphosis consummata)」に至るための方法なのであろう。結局のところ水晶は、月下世界どころか天空世界をも超えた天使世界の探究に使用されることとなる。

4. スクライングと天使魔術

ディーが行ったスクライニング・セッションの最初の記録は 1581 年 12 月 22 日であるが、1579 年には既にスクライヤーを雇っていた。『ユークリッド幾何学原論』英訳版の刊行からおおよそ 10 年後のことである。ディーが雇ったスクライヤーは少なくとも 4 人いると言われている。中でも有名なのがエドワード・ケリー (1555-1597) である。スクライニング・セッションはおおよそ以下のような形で行われる。

ケリーは投射石 (shew-stone) のセットされている机の前でひざまずき、祈り嘆願してから石を凝視する。その間ディーは小礼拝堂に退出し、祈りをもって天使の出現を嘆願する。そして 15 分ほど経つと石の中にケリーは何かを見る (FBM, 66f)。彼はそこで見聞きしたことを逐一口頭で報告する。ディーは別のテーブルでこれを記録し、天使や精霊に様々な質問を投げかける。

彼らのスクライニング魔術で興味深いのはその道具類である。魔術道具の制作法自体がスクライニングによって現れた天使達によって教示されたという点は、彼らの魔術の大きな特徴である。スクライニングの作業台となる「神聖なるテーブル」(図 1) は、スウィート・ウッドを用いた 2 キュービット四方のテーブルで、高さ 2 キュービットの四本脚で支えられる (FBM, 71-72)。テーブル表面の中央には、「エメトのシジル」(図 2) という直径 9 インチの蠟の円盤がのせられ、その周りには、「創造の記章」という錫製の板が、7 枚並べられる。テーブルの四脚の下にもそれぞれ小型のエメトのシジルが置かれる (FBM, 395-6)。テーブルはシルクのテーブルクロスで覆われ、台の中央に、シジルとクロスを挟んで水晶玉が置かれる (FBM, 71)。スクライヤーは指輪をはめ、純金で作られた「ラミン」(図 3) とされる胸当てを首から紐でぶら下げ、水晶玉を凝視する¹²。

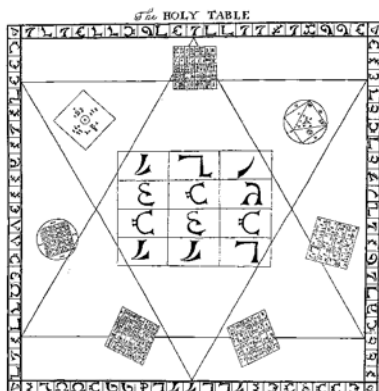


図 1

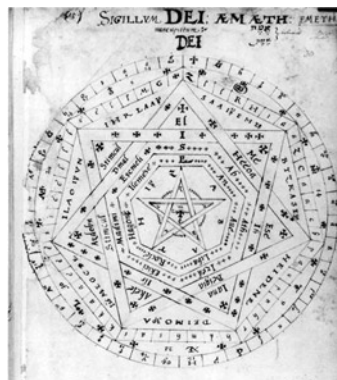


図 2

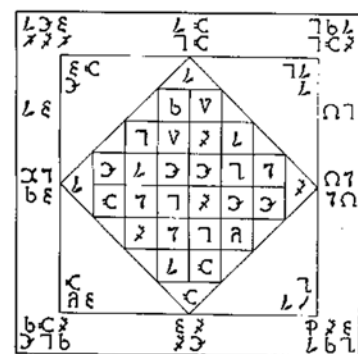


図 3

スクライニングとは、水晶玉や鏡を凝視し、そこにヴィジョンを見てとる技術である。ヴィジョンは催眠トランス状態において現出する。凝視とは基本的な催眠誘導技法の一つであり、水晶玉は、さまざまな光が瞬き、光の模様が不断に変化しているため催眠トランス状態を誘発するには最適の道具である。スクライニングが、お伽話やファン

タジー小説にあるように、遠くの実在を透視できるのか、予言的な能力を持っているのかといった点についてはともかくとして、ヴィジョンが見えること自体は超常現象でも何でも無い。訓練さえ積めば到達可能な経験である。実はディーもヴィジョンを見た経験はある。彼は1581年5月25日の日記の中で「私は自分に対して現れた光景を水晶の中に見た。私は見た。」と書き綴っており (PD, 11)、1582年のセッションでは「大きな雷鳴、「唸り音」を聞き、「耳鳴り」を感じるやいなや、「私の周りにいくつかの精霊たちが現前しているのが見える。」と記している (FBM, 216)。ただ、ディーにはヴィジョンを見たい時に自在に出現させたり、持続的にありありと見てとる能力はなかった。普段のセッションにおいて彼は、天使や精霊をあくまで「信仰」と「空想力」によって見ていたに過ぎない (TFR, 31)。しかし、だからといって彼がスクライヤーの作り出すヴィジョンの世界に、ただ単に傍観者として外側から対峙していただけたとは言えない。ケリーと共に或る種のフォリ・ア・ドゥとでも言うべき状況を作り出していた可能性もある。ディーが天使や精霊に対して質問をしたり、セッションでの対話を整理して記録したりする際に、彼の知的背景が、ケリーの紡ぎ出すヴィジョンの形成内容そのものを暗黙裡に誘導していた可能性は十分考えられる。

アンジェラ・ヴォスは、スクライミングを、アンリ・コルバンが言うところの「想像世界 (mundus imaginalis)」へのアクセス方法として捉えている¹³。想像世界とは、意識によって産み出される空想世界ではなく、想像主体そのものをも巻き込む形で無意識的に湧出してくる「自律の世界」である。スクライミングの場合、基本的には没入型というより、水晶玉をスクリーンとした観察型のヴァーチャル体験であることが多い。しかしディーの記録にも散見されるように、ケリーのヴィジョンは、時には水晶玉という立体スクリーンを離れ、部屋全体を舞台とすることもあるし、知覚世界から全く断絶することもある。しかもケリーのヴィジョンは視覚や聴覚のみならず触覚をも伴う、実にリアルな経験世界である。

想像世界は、感覚的世界と知的世界を媒介する「中間世界」である。しかしそれは感覚的世界や知的世界と独立に存在しているわけではない。あるのはただ「感覚的なものの非質料化」と「知的なものの形象化」という二つのプロセスだけである。現れたものを隠すべく、象徴へと変形されねばならない感覚データと、隠れたものを顕現すべく、顕わにされねばならない知的データ、これら二つのデータの隠れたりアリエーを露呈するのが「元型的想像力」に他ならない¹⁴。

ところで、ルネサンス魔術には大きく分けて二つの類型がある。フィチーノに代表される自然 (星辰) 魔術とピーコ・デッラ・ミランドラ (1463-1494) に代表されるカバラ的な天使魔術である。自然魔術が印形や図像を道具として、魂における低次の部分の働きとしての想像力を活用するのに対して、天使魔術は、数字や文字を操作しつつ、魂の合理的な部分である知性を活用する。もっとも、ここで言われる知性というのは推論的知性ではなく、直観的知性、或いは「恍惚状態での合理的魂」とでも言うべき知性を意味する¹⁵。おそらくこれら二つの魔術は、元型的想像力のもつ二つの機能と対応するのではないだろうか。つまり、元型的想像力の内、感覚の象徴化の機能に力点をおいて遂行されるのが自然魔術であり、知性の形象化に力点を置いて遂行されるのが天使魔術であると言うことはできないであろうか。

ディーの天使魔術も例外ではない。たしかに、ケリーのヴィジョンには、決して具体的な映像ばかりでなく、むしろ抽象的な数や文字が多く登場する。例えば天使によって啓示された「ログの書」と言われるテキストは、49×49の升目に文字や数字がぎっしりと埋め尽くされた95枚の文字盤からなる (図4)¹⁶。天使が文字盤を使って一文字ずつ指しながら召句を告げる。それをケリーが見て、ディーに伝える。文字が逆の順序で告げられることもある。実に骨の折れる作業である。しかもこれらの言葉は「天使語」、通称「エノク語」と呼ばれる独特の言語で綴られ (図5)、後で発音の仕方と英語訳が教示される。言語学者のレイコックによれば、エノク語は音韻体系、統語論、文法ともに一貫した構造をもっている¹⁷。先に触れた「神聖なるテーブル」、「エメトのシジル」、「ラミン」の表面に描かれている天使の名前も、文字盤を天使の指示に従って様々な方向や順序で辿りながら割り出したものである。

スクライミングがトランス状態における行為であるにもかかわらず、その産物がこのような極めて緻密で均整のとれた規則性を有することに驚きを覚えずにはいられない。夥しい数の文字や数字が延々と登場し、それを一つ一つ表にまとめ上げ、さらにそれをもとに気が遠くなるほど退屈な、とはいえ繊細な注意力を有する文字の置換を繰り返

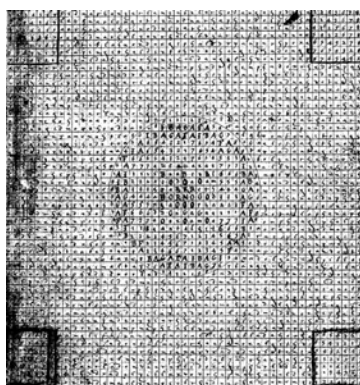


図4

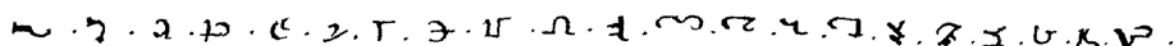


図5

返していくディー達の営みは、アブラハム・アブラフィア（1240-1291）の「恍惚のカバラ」におけるツェルフの技法さながらである。ツェルフというのは、独特の呼吸法と身体動作を行いながら文字を延々と置換することによってトランス状態になり、天使と邂逅する瞑想法である¹⁸。もちろんディーは聖書解釈の技法としてのツェルフは熟知していたが、それをトランス誘導の方法論として、果たしてどこまで自覚的に捉えていたのであろうか。

おわりに

「数学的序文」では、諸々の自然的諸学問が数学的に基礎付けられ、体系化されるとともに、それを経験的に検証すべく、至高技芸という究極的な知の境位が語られ、その方法論の一つとしてスクライミング魔術が要請された。一方『聖刻文字のモナド』では、諸々の自然的諸学問の根底に世界創造の法則を問うエクソテリックな諸原理が置かれ、それを照明する実在のカバラという方法論が提示された。エソテリックな原理はさしあたり錬金術として遂行される。しかしディーにとって錬金術は世界創造の原初にまで届くものではなかった。後に行われる天使召喚魔術こそ、錬金術の果たし得なかった課題を受け継ぐものであり、それは「数学的序文」で語られたスクライミングという方法論へと結びついていく¹⁹。

つまりディーにとってスクライミング魔術とは、諸々の数学的学問と矛盾するどころか、むしろそれらの正当性を検証する役割を果たしているのである。現代の我々からすれば、いくらか奇妙な考え方に映るが、かのノーベル賞物理学者パウリが、ユングの助けを借りながら、スクライミングとまでは行かないにせよ、自分の夢を熱心に分析した結果、あの「排他原理」の着想を得たことを考えると、それ程理解不可能なことではない。ディーが至高技芸の一環として行ったスクライミング・セッションは、パウリと同様、「科学概念の創造に使われる元型的イメージ」に光を当てる試みであったと言えないだろうか²⁰。

重要なのは、夢であれ、スクライミングで得られたヴィジョンであれ、それらをどのように受け止め、解釈するかである。ヴィジョンの世界は、知的世界の形象化が起こる象徴世界である。この象徴の持つ豊かな多義性を無視して一義的に解釈し、それをドグマとして立ててしまうのはあまりに楽天的かつ素朴である。むしろスクライミングは、既成の枠組みを一旦多義的な象徴世界へと解体し、様々な解釈の可能性を開くと同時に、意味が原初的に立ち現われる場面へと我々をいざなってくれる、極めて有効なツールと言えよう。

引用文献

John Dee [] 内略号

[PA.] *John Dee on Astronomy: Propaedeumata Aphoristica (1558 & 1568)* edited by Wayne Shumaker, Berkeley: University of

California Press, 1978.

[MH.] *Monas Hieroglyphica* (1564) translated by C. H. Josten, *Ambix*, Vol. XII, 1964.

[MP.] *The mathematical praeface to the elements of geometrie of euclid of Megara* (1570): Introduction by Allen G. Debus. New York (Science History Publication), 1975.

[TFR.] *True & Faithful Relation of What Passed for Many Years Between Dr. John Dee...and Some Spirits.*, ed. Meric Casaubon, London, 1659.

[PD.] *The Private Diary of Dr. John Dee*, edited by James O. Halliwell, New York: AMS Press, 1968.

[FBM.] *John Dee's Five Books of Mystery: Original Sourcebook of Enochian Magic: From the Collected Works Known as Mysteriorum Libri Quinque*. Ed. Peterson, Joseph H., ed. Boston: Weiser Books. 2003.

ローマ数字は断片の番号、アラビア数字はページ数をあらわす。

図版

図1 神聖なるテーブル Sloane MS 3188 TFR, *77.

図2 エメトのシジル Sloane MS 3188.

図3 ラミン FBM, 386.

図4 ログの書 (通称「エノクの書」) から抜粋。TFR, *78.

図5 天使語の文字 FBM, 269.

注に挙げたもの以外の参考文献

Calder, IRF.: John dee Studied as an English Neoplatonist, unpublished Ph.D. thesis, University of London, 1952.

Clucas, Stephen: "Non est legendum sed inspiciendum solum: Inspectival Knowledge and the Visual Logic of John Dee's Liber Mysteriorum," in *Emblems and Alchemy*, ed. Alison Adams and Stanton J. Linden (Glasgow: Glasgow Emblem Studies, 1998).

Clucas, Stephen: John Dee's angelic conversations and the Ars notoria: Renaissance magic and mediaeval theurgy. in: Clucas, Stephen, ed. *John Dee: interdisciplinary studies in Renaissance thought*. Dordrecht: Springer, 2006.

Clulee, Nicholas H.: Astrology, Magic and Optics: Facets of John Dee's Early Natural Philosophy, *Renaissance Quarterly* 30, 1977. Clulee, Nicholas H.: At the crossroads of magic and science: John Dee's Archemastrie. Contributor, Clulee, ed. By Editor, Vickers, *Occult and Scientific Mentalities in the Renaissance. Place*, New York, 1984.

Feldman, Christopher: A Problem of Authorship: John Dee, Edward Kelley, and the 'Angelic Conversations', *Science and the Occult in Eorpean History*, Purdue University, West Lafayette IN, 2010.

French, Peter J: *John Dee: the world of an Elizabethan magus*. London: Routledge & Kegan Paul, 1972. (フレンチ著『ジョン・ディー: エリザベス朝の魔術師』、高橋誠訳、平凡社、1989年)

Gray, Shawn: *From Dee to the Golden Dawn, to Crowley and Beyond: The Evolution of Enochian Angel Magic from the Renaissance to Modernity*, unpublished master thesis, Exeter University, 2008.

Ramplng, Jennifer: Introduction to 'John Dee and the Sciences: Early Modern Networks of Knowledge', *Studies in History and Philosophy of Science* 43, 2012.

Ramplng, Jennifer: The Elizabethan Mathematics of Everything: John Dee's "Mathematicall Praeface" to Euclid's *Elements*, *BSHM Bulletin: Journal of the British Society for the History of Mathematics*, 26, 2011.

Shumaker, Weyn: Renaissance *Curiosa: John Dee's Conversations with Angels, Girolamo Cardano's Horoscope of Christ, Johannes Trithemius and Cryptography, George Dalgarno's Universal Language*, Binghamton NY, SUNY Press, 1982.

Sledge, James Justin: Between Loagaeth and Cosening: Towards an Etiology of John Dee's. Spirit Diaries, *Aries* 10, 2010.

Szönyi, György E.: From the Hieroglyphic Monad to Angel Magic. Semiotic Aspects of John Dee's Esotericism, *Lexia*, No. 11-12, 2012.

Szulakowska, Urszula: *The Alchemy of Light: Geometry and Optics in Late Renaissance Alchemical Illustration*. Leiden, Brill, 2000.

Whitby, Christopher: John Dee's Actions with Spirits: 22 December 1581 to 23 May 1583. 2 vols. New York: Garland Publishing, 1988.

Yates, Frances A.: *The Occult Philosophy in the Elizabethan Age*. Routledge, London 2001. (イエイツ著『魔術的ルネサンスーエリザベス朝のオカルト哲学』、内藤健二訳、晶文社、1984年)

横山茂雄: 「ジョン・ディーと精霊 (I-III): A True and Faithful Relation of What Passed between Dr. John Dee and Some Spirits (1659) をめぐって」、『外国文学研究』(奈良女子大学文学部ヨーロッパ・アメリカ言語文化学講座)、(19-21)、2000-2002年

注

- 1 Yates, Frances A.: *Theatre of the World*, London: Routledge and Kegan. Paul, 1969, p. 5-6. (『世界劇場』、藤田実訳、晶文社、1978年)
- 2 Clulee, Nicholas H.: *John Dee's Natural Philosophy: between science and religion*, London: Routledge, 1988, p. 171.
- 3 Debus, Allen George: "introduction", in: *The mathematical praeface to the elements of geometrie of euclid of Megara (1570)*: New York (Science History Publication), 1975, p. 21-22.
- 4 Bacon, Roger: The 'Opus Majus' of Roger Bacon, edited by John Henry Bridges. 2 vols. New York:Cambridge University Press. 2010 (1983), p.172, 202, 215. (『ロジャー・ベイコン 科学の名著3』、伊東俊太郎編・高橋憲一訳、朝日出版社、1980年 365, 395, 407頁。)
- 5 実際、ディーはこのテキストの写しを所有しており、この言葉に下線を引いているとのことである。Clulee, Nicholas H.: *ibid.*, p.167.
- 6 クルリーによれば、『ピカトリクス』のアラビア語版において登場する nirang という語は「魔術的な幻惑ないし呪文」を意味している。Clulee, Nicholas H.: *ibid.*, p.167.
- 7 Ref. Walker, D.P.: *Spiritual and Demonic Magic from Ficino to Campanella*, Studies of the Warburg Institute, Vol. 22, London: Warburg Institute, 1958. (ウォーカー著『ルネサンスの魔術思想—フィチーノからカンパネッラへ』、田口清一訳、平凡社、1983年)
- 8 グロステストとベイコンのスペキエス増殖理論については主に以下の文献参照。
Heilbron, J.L.: "Introductory Essay", in PA, 61-66. 高橋憲一「グロステストとベイコンの自然観—光の創世論から光の自然学へ—」、『中世の自然観 中世研究 第7号』、上智大学中世思想研究所編・創文社、1991年。
- 9 Clulee, Nicholas H.: *ibid.*, p.57.
- 10 Szönyi, György E.: Paracelsus, Scrying, and the Lingua Adamica : Contexts For John Dee's Angel Magic. Clucas, Stephen, ed. *John Dee: interdisciplinary studies in Renaissance thought*. Dordrecht: Springer, 2006, p.213.
- 11 おそらく、後年にディーがスクライニングを通して直面した「神の医術 (medicina Dei)」という問題と深く関わるのではないだろうか。ホーカンソンによれば、それは単に容器内での実体の完全化ではなく、世界全体の腐敗を治療し回復する術である。 Håkansson, Håkan: *Seeing the Word: John Dee and Renaissance occultism*. Lund: Lunds Universitet, 2001. p.318-331. Harkness, Deborah E.: *John Dee's Conversations with Angels: Cabala, Alchemy, and the End of Nature*. Cambridge University Press, 1999, p.195-214. ヴォアルカドゥミアとは、諸元素の再組織化によって金属の実際的変成を目指すジョヴァンニ・アゴステイノ・パンテオの錬金術のこと。Ref. Norrgren, Hilde. "Interpretation and the Hieroglyphic Monad: John Dee's Reading of Pantheus's Voarchadumia." *Ambix* 52. 3, 2005. 達人術とは、ヘルメス学、錬金術のことを意味する。Clulee, Nicholas H.: *ibid.*, p.85.
- 12 ちなみに、スクライニングに使用される投射石 (shewstone) は、ディーの記録の中で、少なくとも四種類登場する。一つ目は「大水晶玉」と呼ばれるもので、1581年12月22日の朝、最初のスクライヤーであるバーナバス・ソールとのセッションで使われた (FBM, 61)。二つ目は頂きに十字のついたフレームに収められている水晶玉である (FBM,63)。ディーによれば、友人から譲り受けたものだという (FBM, 66)。三つ目は天使から授かったと言われる石である。指輪も天使ミカエルから授かったとされているが (FBM, 78-9)、どちらもケリーの手品に騙されたのであろう。四つ目は黒曜石の鏡である。これはディーの記録には記載されていないが、大英博物館の416号室 (「ヨーロッパ中世」の部屋) にディーの遺品として保蔵されている (登録番号 1966, 1001.1)。一時期、ゴシックロマン小説『オトランド城奇譚』の作者として有名なホレス・ウォルポール伯爵のコレクションともなった曰くつきの代物である。これが本当にディーのものであったのか、真偽の程は定かではない。
- 13 Ref. Voss, Angela: Scrying, *The Occult World*, ed. C. Partridge, 2013.
- 14 Mahmoud, Samir: "Alam al-mithal or Mundus Imaginalis." MPhil, Faculty of Divinity. University of Cambridge. England, UK, 2005. マーモウドは「知的なものの精神化」と表現しているが、「形象化」の方が適切かと思われる。
- 15 Ref. Hankins, James: Ficino, Avicenna and the Occult Powers of the Rational Soul, *Fabrizio Meroi and Elisabetta Scapparone*, eds., *Tra antica sapienza e filosofia naturale: La magia nell' Europa moderna*. Florence: Leo S. Olschki, 2007.
- 16 天使ガルヴァによれば Logaeth と書いてロガ Logah と発音する。TFR, 19.
- 17 Ref. Laycock, Donald C.: *The complete Enochian dictionary: A dictionary of the Angelic language as revealed to Dr. John Dee and Edward Kelley*, London: Askin, 1978.
- 18 Ref. Idel, Moshe: *The Mystical Experience in Abraham Abulafia*. Albany: State. University of New York Press, 1988.
- 19 もっとも、錬金術が「数学的序文」のコンテキスト中でどのような位置づけを持つのかという疑問は残る。
- 20 Ref. Jung, C. G. and Pauli, W. : *The Interpretation of Nature and Psyche*, By Routledge and Kegan Paul, London, 1955. (『自然現象と心の構造—非因果的連関の原理』、河合隼雄・村上陽一郎訳、海鳴社、1976年)